荒地に洞を掘り堤を築き水を得る

潮　音　洞

関が原の戦いに敗れ、防長二国三十六万石に減封された毛利藩は、当初から藩財政が逼迫していました。この立て直しとして多くの家臣団を整理するとともに、農民には収穫高の七つ三歩（七割三分）という高率の租税を課したにも関わらず、寛永 21 年（1644）時で藩の年収以上の借金がありました。この財政難を救う術は財政の基盤が米である以上、米の増収を図る事でした。高泊（たかどまり）開作（山陽小野田市）や潮合（しあい）開作（防府）など藩自らも開作につとめましたが、民間にも自力による開作を奨励しました。この結果、江戸時代の 260 年間で 50% 近く田畑が増加しています。

周防国都濃（つの）郡の鹿野（かの）（現・周南市大字鹿野上）は周囲を山々に囲まれた盆地で、田畑は全面積の 4 %にすぎません。地域を流れる田原川は川床が低く、田畑への用水どころか生活用水にも不便を強いられていました。

ある日、岩崎想佐衛門は漢陽寺の裏を散策中に、盆地の東を流れる渋川の水を引いて農業用水にすることを思いつきます。慶安 4 年（1651）萩藩の許可を得た想佐衛門は、自費で漢陽寺山の掘削に着手しました。渋川から水を引き、承応 3 年（1654）に漢陽寺の洞入口までの水路 270 m、洞の長さ 88 mの潮音洞は 3 年後に完成しました。

当時の洞は槌（つち）と鑿（のみ）の手掘りのうえ、測量技術も未熟で左右に曲がっていますし、掘り始めの高さは 1.3 mですが、途中から大人が腰を曲げてやっと通れるほどです。また、水路の東方には掘り進んだものの中止したとみられる跡があることから、改めて現在地から掘りなおしたと思われます。

潮音洞の名がついたのは完成から 150 年頃、寺の住職が経本から名づけたとのことです。想左衛門の潮音洞は、下流水路の完成によって漢養寺開作、三井開作、湯浅開作、岩崎開作などの新田開発を進ませ、不毛の台地を 21.7ha の豊かな田畑に変えました。この水路の完成によって、いままで、田原川に近接していた古市の住民たちは鹿野原に移り住み、鹿野新市が繁栄し、反対に古市の跡地は開作されて田畑になっています。

現在は渋川の水を引く導水路部分が 870 m、下流水路 1000 mに改良され、鹿野の地を潤しています。

山口県指定文化財「潮音洞」出水口（漢陽寺庭内）

■位置図

平成井堰
水を引いた渋川の取水口に平成 2 年井堰が設置された

想左衛門の功績を称え、永遠に記録をとどめておこうと「潮音洞」上部に石碑が建立されている